

住まい方と仕切り方に関する研究 － 奄美大島A集落の事例を通して －

Keywords

住まい 仕切り 境界
空間構成



K07059 菅原 萌里

1. はじめに

1.1 研究目的

住居には、多くの工夫が施されている。それは、人が長い歴史の上にきずきあげた、その気候・風土に適合したものである。その工夫は、様々な理由により、姿を消しつつある。

本研究は、本土とは異なる気候・風土の環境にある、奄美大島の住居を対象とし研究する。

奄美大島の住居については、何棟かに分けて建てる分棟型形式が特徴として挙げられる。その理由は様々な考えられるが、一つの大きな理由として、頻発する台風被害に対する工夫であると考えられる。また、このような住居は、空間構成も独特で住まい方に大きく関わっている。しかし、近年、工業建材を使った一棟型形式の住居が建てられるようになった。

分棟型形式では、棟がひとつの空間であったのに対して、一棟型形式では、建具や壁などの仕切りによって空間が分けられている。

空間を仕切るということは、部屋を増やすだけではなく、空間の使われ方が細かく分かれることでもある。

本研究は、仕切り＝境界に注目しながら、A集落の住居にみられる空間構成や住まい方の変化を明らかにするものである。

1.2 研究方法

- ・ 調査期間：2010年7月25日～8月17日 計24日間
- ・ 調査地：奄美大島龍郷町A集落
- ・ 調査内容：集落空間、住居空間、屋敷構えの実測、住民への聞き取り調査、龍郷町役場や図書館における文献調査

2. 調査地の概要

A集落は、奄美大島龍郷町の最西部に位置し東シナ海に面する。集落には、A川が流れており、集落南部の水

田ではこの水を使い、現在でも稲作が行なわれている。

戦後は、復員兵等で人口も多かったが、職を求めて沖縄等に移住する人が多く、人口は減少している。現在は、高齢化が進んでおり、高齢者の一人暮らしが多い。

3. 住居の概要

3.1 伝統的住居

伝統的な住居の特徴は、主屋（オモテヤ）と副屋（トグラ）とに分かれていることである（図1）。接客を主とした棟をオモテヤ、家族が日常的に生活する棟をトグラとしていた。全ての棟の屋根は、茅葺きであった。

敷地は、周囲を珊瑚の石垣と亜熱帯性植物の防風林に囲まれている。石垣と防風林に囲まれた内部全体を一つの屋敷地としていた。

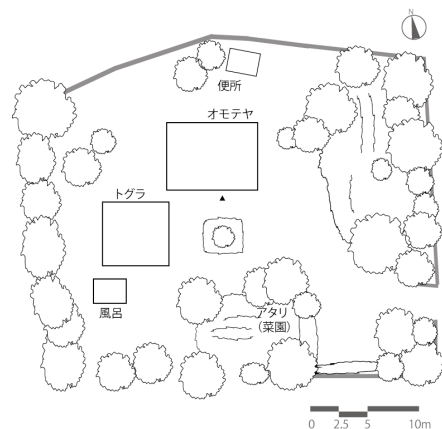


図1 伝統的な住居の屋敷構成

建物の主な構造は、ヒキムン構造という特殊な方法によりつくられていた。

オモテヤは前面に「オモテ」、後面に「ウチ」（ウラ）の2室が並ぶ形式が基本となっている。ウチは、ネショ（寝室）とゴザで構成される。オモテでは、接客、宗教・儀式的行事、集落の集まりなどがおこなわれ、普段はあまり使用されない。ネショは、就寝空間であり、オモテの予備的な部屋でもあった。ゴザは、閉鎖的な空間で、出産などのプライバシーの高い用途に用いられた。

また、病人が出たとき、病室としても使われた。

トグラは、居間や茶の間、食堂として使われ、家族が日常的に生活する場である。一般に区切りはない。囲炉裏（ジロ）が設けられるのが普通であった。囲炉裏またはカマドで炊事を行い、その周囲で食事をする。

3.2 A集落の住居

すでに述べたように、伝統的住居の敷地は、珊瑚の石垣と亜熱帯性植物の防風林に囲まれていたが、現在の屋敷構成は、ブロック塀で敷地を囲う住居が多くみられる。

住居形式として、一棟型形式の住居、分棟型形式の住居、分棟型形式の住居を屋根や廊下などで繋げた形式の住居が存在する。分析に先立って、以下に住居形式の分類を示すが、本研究では、接客を主としたオモテと、家族が日常的に生活するトグラが別の棟となっているものを分棟型形式とする（図2）。

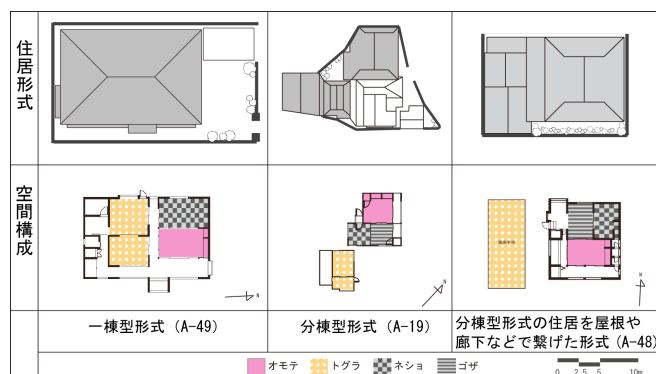


図2 住居形式別の空間構成

調査では、屋敷も含めた実測数は74戸だったが、住居内の実測が可能だったのは50戸であった。50戸の住居を分類したところ、一棟型形式が45戸、分棟型形式が2戸、分棟型形式の住居を屋根や廊下などで繋げた形式が3戸あった。

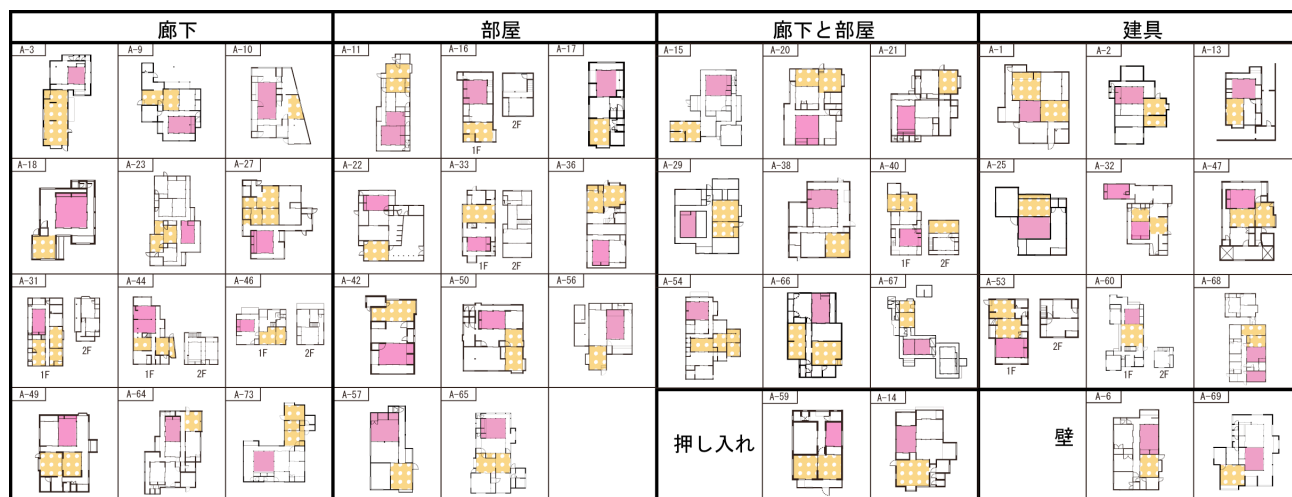


図4 分類別空間構成の一覧図

4. オモテとトグラの関係

一棟型形式の住居45戸について、オモテとトグラの位置関係を仕切り方で分類してみると、部屋や廊下などの空間によって仕切られているものと、襖や扉など建具、壁によって仕切られているものがあった（図3）。

分棟型形式の住居のオモテとトグラの位置関係は、棟で分けられている住居と、棟の中で混合している住居がみられた。

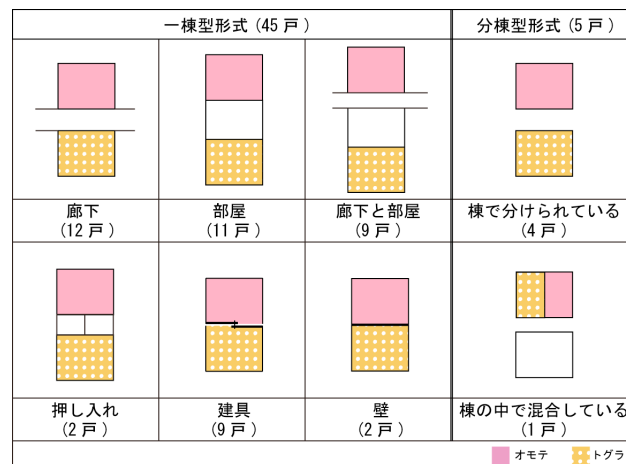


図3 仕切り方別のモデル図

オモテとトグラが廊下によって仕切られている住居では、トグラの間取りの特徴として、炊事空間と食事空間が分かれているという点が挙げられる（図4）。しかし、実際には、炊事空間と食事空間の仕切りは、開けていることが多く、ひとつの空間として使っている（図5）。

オモテとトグラが部屋によって仕切られている住居では、オモテは普段居室として使うことがないが、トグラへの通り道として使われている住居が多く見られた。さらに、トグラの特徴として、炊事と食事の両方がひとつの空間で行われることが多いことが挙げられる。

オモテとトグラが部屋と廊下によって仕切られている住居、オモテとトグラが押し入れによって仕切られている住居では、オモテとトグラは、空間的にも機能的にも明確に分けられている。

オモテとトグラが建具によって仕切られている住居では、オモテが食事空間として使われる一方で、トグラで接客を行う住居がみられた。このように、間取りと実際の使われ方が違っている住居が多くあった。このような傾向は、比較的新しい住居に多くみられる。

オモテとトグラが壁によって仕切られている住居では、オモテとトグラは押し入れによって仕切られている住居同様、空間的にも機能的にも明確に分けられている。

5. トグラの仕切り

次に、トグラの仕切りに着目してみる。3で述べたように、オモテとトグラが廊下によって仕切られている住居では、間取りからみると、炊事空間と食事空間が分かれている事例が多く見られたのに対して、部屋によって仕切られている住居では、炊事空間と食事空間がひとつの空間であることが多かった。しかし、ひとつのトグラの中でも炊事空間と食事空間を分けて使っている住居もみられた。そのようなトグラでは、炊事空間と食事空間を食卓やカーペットなどのモノで仕切っている。壁や建具のような明確な仕切りではないが、モノを使って行為や機能を仕切っているのである(図5)。このように、トグラの中でもモノを利用することにより、行為や空間の

機能に応じて空間は仕切られている。襖や扉などの建具のように明確な境界ではないが、空間はゆるく仕切られているのである。

6. 考察

4で見たように、間取りからみる空間構成と使われ方からみる空間構成は異なる。また、仕切り方によって空間の使われ方はちがう。さらに、間取りにはあらわれてこない仕切りが存在することもわかった。以下では、このような現象をもたらした背景とそれによる住まい方への影響を語る。

6.1 住居形式

奄美大島の伝統的な住居は、何棟かに分けて建てる分棟型形式が主流であった。しかし、現在は、一棟型形式の住居が多く存在している。一棟型形式の住居が建てられるようになった理由は、工業建材が流入したことなどが挙げられる。A集落でも、すべての住居で、トタン、スレート、かわらのいずれかが屋根に使われていたことや敷地の周囲をブロック塀で囲う住居が多くなっているということからも、そうした流入の影響がうかがえる。

住居形式や屋敷構成をみると、伝統的な住居の構成が崩れてきていることがわかる。このような変化をもたらした背景として、戦後の「本土並み」を目標とした復興・振興事業により、あらゆる面で本土の影響を受けたこと、さらに物流の発展によって、本土の建材を取り寄せることが容易になったことが考えられる。このよう

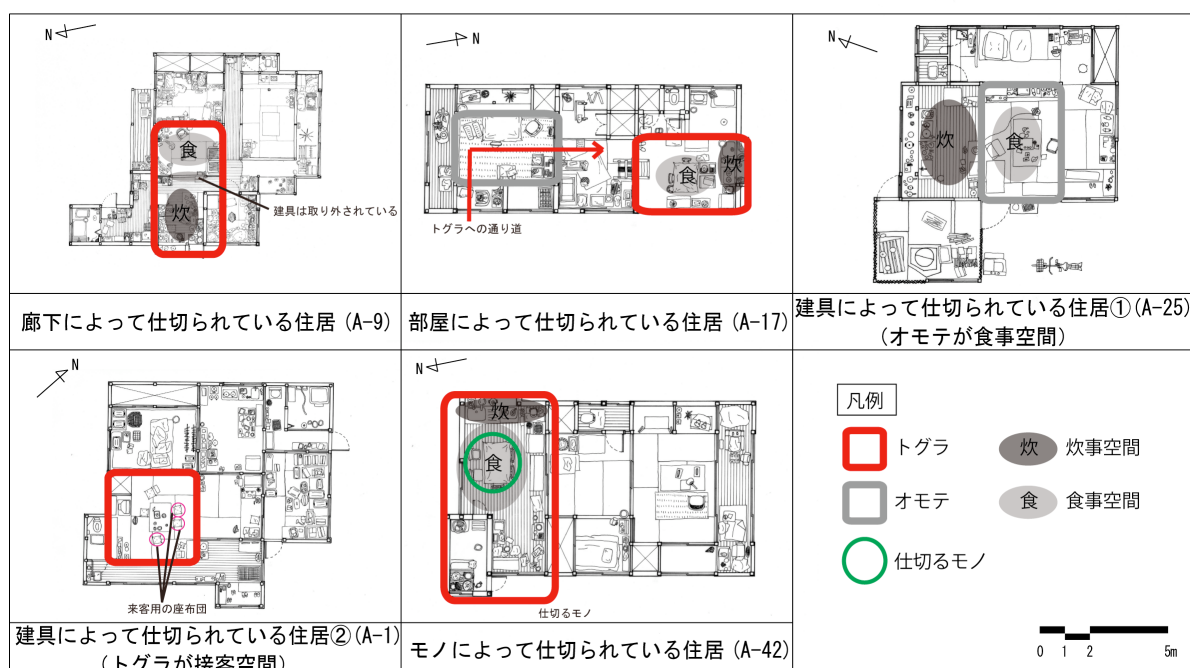


図5 分類別空間構成の詳細図

に、本土の文化や技術の流入は、住居形式の変化に強く影響したのである。

6.2 空間構成

しかし、空間構成については、伝統的な住居の構成を受け継いでいる。ほとんどの住居は現在でも、オモテ・トグラ・ネショ・ゴザを基本として住居を構成している。

利便性や経済性を追求し、本土の住居形式を取り入れたことで、伝統的な住居形式は薄れつつあるが、本土とは違う気候・風土の中で生活をしていく中で、長年にわたって培われた知識や知恵が必要とされ、伝統的な住居の構成が残されていると考えられる（図6）。

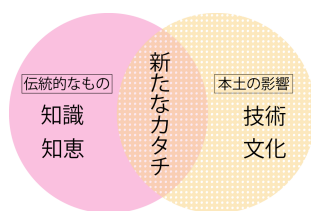


図6 カタチをつくりだす要素

6.3 仕切られ方と使われ方

伝統的な間取りを踏まえれば、オモテは、接客に使われる空間であり、トグラは、家族が日常的な生活をする空間である。しかし、実際の使われ方では、オモテがトグラへの通り道であったり、食事空間として使われる事例があった。また、トグラで接客を行う事例もみられた。このような空間の使い方は、新しい住居にみられる。

このように、使われ方が変化した背景には、本土の住居形式を取り入れたことに加えて、来客のほとんどが近所の人であるということが挙げられる。近所の人、家族のような関係なので、オモテでのかしこまった接待は必要がないのである。

ネショの位置をみたとき、伝統的住居の場合、オモテ側に配置していたのに対して、現在は、トグラ側に配置している住居が多くある。昔は、オモテでは集会などが行われ、多くの人が集まったとされている。そのとき、オモテとネショとゴザを繋げ、ひとつの大きな空間にしていた。しかし、現在オモテは使われることがないという住居がほとんどである。住居全体でみれば、ネショが加わったトグラに日常生活の機能が集中する傾向にある。これは、高齢化が進み、高齢者が一人で暮らしていることが背景のひとつとして考えられる。足腰が弱い高齢者にとっては、たくさんの居室は必要なく、ひとつの空間

で過ごすことが多いということが関係している。

6.4 認識上の仕切り

ひとつの空間の中でも、異なった作業や使われ方をしている住居がある。例として、炊事空間と食事空間を分けて使っている住居がみられた。その空間には、仕切る「モノ」が存在する。その「モノ」は、食卓、カーペットなどである。間取りにはあらわれてこないが、住人が無意識のうちに、あるいは生活の必要性から仕切りをつくり、ひとつの空間を上手に利用しているのである。

さらに、日中はオモテとして使い、夜はネショとして使っている住居や日中はトグラとして使い、夜はネショとして使っている住居もいくつかみられた。このような住居では、時間によって空間の機能を使い分け、仕切りをつくりだしているのである（図7）。

ところで、異なった行為をひとつの空間で行うというのは、伝統的な住居にもみられた。かつてのトグラには、炉やカマドが設けられ、そこで炊事を行い、その周囲で食事をしていた。ひとつの空間が異なる機能をあわせ持つというのは、長年にわたって培われた知識や知恵による工夫である。だから、現在のA集落では、かつての知識や知恵が住まい方にも残されているといえるのである。

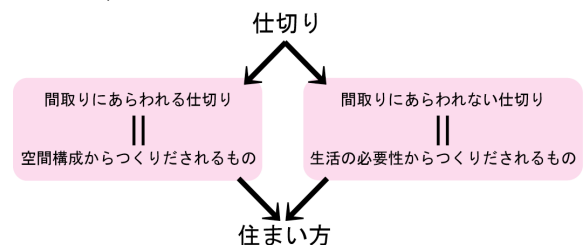


図7 仕切りと住まい方の関係図

7. まとめ

仕切りに着目して空間構成をみていく中で、仕切りには、間取りにあらわれるものとあらわれないものがあるということがわかった。間取りにあらわれないものには、モノが利用されている。その空間は、生活の中で必要に応じてつくりだされる。

さまざまな行為や機能を必要に応じて仕切ることにより空間も変化するのである。

参考文献

- 1) 雪聖子、内田文雄『奄美大島における住居の研究』日本建築学会中国支部研究報告集 第25巻 2002 pp.789-792
- 2) 柏木博『「しきり」の文化論』講談社現代新書 2004
- 3) 龍郷町誌 歴史編 有限会社三立舎 1988
- 4) 龍郷町誌 民俗編 有限会社三立舎 1988